

人物画テスト2枚法の臨床的有用性の検討 — 自己理解を促す「描画後の質問」の考案 —

天満 弥生¹⁾ 石田 弓²⁾ 内海 千種³⁾

An Examination of Clinical Usefulness for Twice Drawing Method of Draw-A-Person Test :
Post Drawing Interrogation to prompt self-understanding

Yayoi TENMA Yumi ISHIDA Chigusa UCHIUMI
Department of Psychology, The University of Tokushima

Abstract

Draw-A-Person Test (DAP) is a kind of drawing test. Drawing test is expressed an unconscious emotion and desire without speaking, therefore a tester needs “Post Drawing Interrogation (PDI)” to understand an unconscious emotion and desire. PDI prompts self-understanding and narrative. However, there is not a study about PDI.

Twice drawing method is to carry out usual drawing test as two times in one assessment. This method is apt to express an unconscious emotion and desire above standard drawing test. I devised twice drawing method of DAP. But twice drawing method of DAP is not used in addition to useful PDI.

This study attempts to devise Post Drawing Interrogation for twice drawing method DAP, PDI prompts self-understanding. I performed investigation for collage students and graduate students. They draw a person first, and answer PDI about the drawing. They are asked to draw a second person and answer PDI for the drawing without a break.

PDI about the first drawing stimulated the second drawing and narrative. As a result, the first drawing is related to the second drawing. This process makes students understand for personal relations and make one's way into the future.

Key words: Draw-A-Person Test ; Post Drawing Interrogation ; Twice drawing method ; self-understanding ; narrative

1)徳島市適応指導推進施設すだち学級 SUDACHI GAKKYU; Adjustment Guidance Class for School Non-Attendance of Tokushima City

2)広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University

3)徳島大学総合科学部 Faculty of Integrated Arts and Science, The University of Tokushima

問題と目的

1. 描画テストとは

描画テストとは、「心理臨床の場において何らかの目的を持って、被検者に鉛筆やクレヨンなどを与え、紙上に何かを表現させるテスト」（高橋，1974）であり、心理臨床場面において、クライアントのパーソナリティや病理性のアセスメント、さらに心理療法の補助手段として用いられている。Koch(1949)の樹木を描かせるバウムテスト、Machover(1949)の男女一対の人物像を描かせる人物画テストなどが主な描画テストとしてあげられる。

「絵によって言語化できない感情や欲求が図示的に表現されることがある」（高橋，1986）ことから、描画には、言語を介さずにクライアントが自身の内的世界を表出することが可能であると考えられる。言語を介さないことで、クライアントの無意識的側面が表れることに描画テストの有用性が考えられるが、その一方で、高橋（1986）は、描画には対話という言語を介して理解することにも有用性があると述べている。「クライアントと検査者が描かれた絵を中心に話し合うことで、検査者にとっては、絵に表れたクライアントの内的世界を理解することが可能となり、クライアントにとっては、自身の抑圧していた感情を解放することや、これまでクライアント自身が気づかなかった考え方や欲求などを理解し、自己洞察が進むことが可能になる」（高橋，1986）ことから、描画テストは、心理アセスメントとして機能するだけでなく、心理療法の補助手段としても機能することが考えられる。

また、近年、描画とナラティブの関係が注目されており、生地（2006）は、描画が語りの刺激となり、語りの流れを作り出すことがあると述べている。また、岸本（2006）も同様に、描画には、言語と異なるコミュニケーションの窓を開くだけでなく、語りを促す一面もあることを述べている。描画には、クライアントの語りを促す側面があり、クライアントとセラピストの対話を促進させる機能もあると考えられる。

2. 「描画後の質問」の有用性について

描画テストは、言語を介さずに感情や欲求が表出されることから、クライアントのパーソナリティをより深く理解できるとされている。そのため、描画に表現されたものを検査者の主観的な解釈に偏ることなく客観的に理解するとともに、クライアント自身が自己の内面を洞察するため、検査者がクライアントに対して描かれた絵について、「描画後の質問（Post Drawing Interrogation：PDI）」を行う必要があると考えられている。個々の事例を通して検査者が経験的に PDI の有用性を報告している（高橋，1974）が、PDI に関する研究はほとんどなされていない。

また、高橋（1974）によると、PDI は一定の質問をする必要はなく、描かれた絵にあわせて PDI を実施していけばよいとされており、各描画テストにあわせた特定の PDI はないと考えられる。

3. 「人物画テスト 2 枚法」について

描画テストにおける 2 枚法とは、1 枚目の描画の後に、もう 1 枚描画を実施するものであり、これまでに山下ら（1983）や森田（1995）、野瀬（1997）によって、バウムテスト

2枚法の有用性が示されてきた。統合失調症者を含む臨床群にバウムテスト2枚法を実施した結果、1枚目と2枚目の描画の違いが大きく、多くは2枚目の描画の豊かさが低くなる傾向が明らかになった。臨床群は十分な心的エネルギーを有しておらず、2枚目において1枚目と同程度の心的エネルギーを利用することができないために2枚目の描画の豊かさが低くなると考えられ、バウムテスト2枚法からエネルギーの持続性やストレス耐性を検討することが可能であることが示された。さらに、2枚目の描画が崩れ、貧困である場合は予後が悪く、2枚目には将来イメージや予後が表れやすいことが考えられ、2枚目を描くことにより、1枚目で得ることができる被検者自身の人格に関する側面と同時に、通常の1枚における施行法では表現されにくい心理力動性が明らかになりやすいことが示された。以上のことから、2枚法は、クライアントのパーソナリティを理解する補助手段として、より多くの情報を提供し、実施方法として望ましいものであると考えられる。

天満(2004)は、人物画を描かせた後にもう1枚人物画を描かせる「人物画テスト2枚法」を考案した。そして、心理臨床場面において、人物画テスト2枚法を施行する際の有用な視点を見出すために、大学生を対象に人物画テスト2枚法を実施し、健康な大学生に表れやすい人物画テスト2枚法の特徴を明らかにした。健康な大学生では、2枚ともに顔、胴体といった身体部位がほぼそろった人物像が描かれる傾向があり、形式的側面において1枚目と2枚目の人物像に大きな違いは生じなかった。ただし、人物像の描写に表れやすい自我同一性という視点から人物画テスト2枚法の特徴を明らかにした結果、自我同一性の確立度が高い学生ほど、2枚ともに「目・鼻・口」のそろった顔が描かれる傾向が示された。しかし、PDIを用いなかったため「誰を描いたものか」などの人物像の描画内容についての検討は行えなかった。描画形式、描画内容から人物画テスト2枚法を理解することによって、クライアントに関する情報を多く得ることができ、パーソナリティの理解に役立つと考えられるが、2枚法を有効に活用するのに適切なPDIはまだ考えられていない。

そこで、本研究では、人物画テスト2枚法における有用なPDIを見出すことを目的とする。PDIによって描画内容を明らかにすることで、自己理解が促されると考えられる(新井・田中, 2006)ことから、これから就職や結婚、進学など人生の進路を決定すると思われる大学生・大学院生を対象に、人物画テスト2枚法を実施する。そして、自己探求や自己形成を行うことが重要とされる学生における自己理解を深める一助になることを目指すこととする。

4. 自己理解につながる「描画後の質問」の考案

1) 「描画後の質問」の実施順序について

佐伯(1991)は、「人は絵を描くことを通して、何か新しい意味を作り出そうとしている、あるいは何かの意味を吟味しようとしている」と述べ、絵を描く過程を重視している。また、絵を描く過程を「描き出すことによって自分もまた変わり、変わることによってまた別の描き出しをしたくなってゆく変化過程」として捉えており、描画とともにクライアント自身に変化が生じる可能性が考えられている。

また、角山(2006)は、PDIを行うことにより、クライアントが描画表現に刺激され、それまで気づいていなかった自身の問題などを言葉で表現できるようになり、さらに、その言葉に刺激されて新たな描画表現を生み出すと述べている。PDIを行うことで、クライ

エントの中で新たな気づきが促される可能性があり、次の描画にも影響することが考えられる。

バウムテストや人物画テストなど、他の描画テストでPDIを用いる際には、「描画→PDI」という順序で実施され、PDIの後にもう1枚描画を行うことはない。一方、2枚法は、1枚の描画が終わった後に、もう1枚描かせることにより、クライアントのパーソナリティに関する情報を通常の施行法よりも多く提供し、実施方法として望ましいと考えられている。この2枚法の利点とされる連続して絵を描く過程に「描きだすことによって自分もまた変わり、変わることによってまた別の描き出しをしなくなってゆく変化過程」が生じやすくなると思われる。筆者は、この変化過程をPDIの工夫によって、自己理解や心理アセスメントに役立てられるかどうかを検討したいと考えた。

そこで、本研究では、「1枚目の人物画テスト→1枚目におけるPDI→2枚目の人物画テスト→2枚目におけるPDI」という2枚法独自の順でPDIを実施することとする。1枚目の描画を行い、その描画に関するPDIを行うことで、1枚目の描画から自己への気づきが生じ、さらに次の描画に、1枚目の描画での気づきが刺激となって新たな描画表現を生じさせると考えられる。よって、本研究では、1枚目の人物画に関するPDIが刺激となり、2枚目の描画内容が表現されるかどうかを検討する。2枚の人物画を連続で実施し、PDIを行うことで、1枚目の人物像に関するPDIで明らかになった内容が刺激となり、次の2枚目の描画が表現されることが考えられ、1枚目と2枚目の人物像の間に関係性が生じる可能性がある。そして、1枚目と2枚目の人物像の間に関係性が生じる過程において、学生の自己理解が生じるかどうかを検討する。

2)「描画後の質問」の内容について

青年期には進学や就職、恋愛や結婚といった人生の進路を決定するような問題に直面し、青年は決断と選択をせまられる(山田, 1998)。本研究の対象者である学生も、将来に向けての決断と選択をせまられる立場にあり、自己が今後どのような人生を歩んでいきたいのかを考えることが重要であると思われる。

そこで、本研究では、「将来に向けての話」を展開させるため、PDIにて「人物像に関する物語」を作成させる。描画テストと同じ投射法である絵画統覚検査 (Thematic Apperception Test : TAT) では、各図版の「物語」を作成させる。山本(1992)によると、TATにおける物語作成には、前に何が起きていたか、今何がおきているか、そして、これからどうなるのか、という時間的な流れを生じさせると述べられている。よって、「人物像に関する物語」を作成させるPDIを行うことで、学生自身にこれからどのような方向に向かって人生を歩んでいくのかを考えさせることが可能かどうかを検討する。

また、高橋(1974)によると、人物画はクライアントの現実の自己像や理想の自己像を表すことが多いことから、人物画を解釈するにあたっては、それがクライアントの自己像を表しているのか、理想像を表しているのかをPDIで明らかにすることが重要であると考えられている。人物画にクライアントにおける自己の「現実像」を描いているのか、それともクライアントが望む「理想像」を描いているのかを明らかにすることで、クライアントの状態像や、欲求が理解されると考えられる。

さらに、人物画は自己像だけではなく、クライアントにとって意味のある他者像を表現

することがある（高橋，1974）。クライアントが自分にとって意味のある他者像を描くのは，その他者像がクライアントにとって情緒的に強いつながりがあるとされ，クライアントの対人関係を理解することが可能であると考えられる。よって，人物画に重要な他者像が表れた際，クライアントにとってどのような関係にある他者であるのかをPDIを通して明らかにすることが重要であると思われる。

以上のことから，本研究では，人物画に「現実の自己像」や「理想の自己像」が表れているのか，または「他者像」が表れているのかを明らかにするため，PDIにおいて「人物像のイメージ」や対象者にとって「人物像がどのような存在であるのか」を尋ねることとする。学生自身が人物像を「自己像のどの側面として捉えているのかどうか」，「どのような関係にある他者像として捉えているのかどうか」を明らかにすることで，学生自身の自己理解が生じるかどうかを検討する。

5. 本研究の目的

本研究では，筆者の考案した人物画テスト2枚法における有用なPDIを見出すことを目的とする。

そこで，2枚法独自の順序でPDIを実施し，1枚目と2枚目の人物像の間に関係性が生じるかどうかを検討する。また，PDIによって人物像のイメージを明確にし，人物像に関する物語を作成させることで，自己の状態についての捉え方や，将来の方向性について考えさせ，学生の自己理解を促すことができるかどうかを検討する。なお，より有用なPDIを考案するため，まず20名に個別で人物画テスト2枚法を実施し，自己理解につながるPDIであるかどうかを検討する。その時点で，PDIについて改良すべき点が見つければ検討し，変更する。これを研究1とする。

次に，変更されたPDIを用いて，20名に対して人物画テスト2枚法を実施する。そして，研究1から明らかになった描画特徴やPDIの反応との比較を行い，人物画テスト2枚法を活用するために有用なPDIを考案する。これを研究2とする。

研究1

1. 方法

1) 対象者

大学生・大学院生20名（男10名，女10名，平均年齢=21.9歳，SD=1.64）。

2) 人物画テスト2枚法について

- ①用具：A4判画用紙，鉛筆（B），消しゴム。
- ②教示内容：まず「絵の上手下手は一切関係ありません。ただし，できるだけ丁寧に描くようにしてください」と伝え，人物画の教示に入った。1枚目は「1人の人を描いてください。顔だけでなく身体も描くようにしてください」と教示した。2枚目も1枚目と同様に「もう1枚，1人の人を描いてください。顔だけでなく身体も描いてください」と教示した。
- ③実施順序：「1枚目の人物画テスト→1枚目の人物画に関するPDI→2枚目の人物画テスト→2枚目の人物画に関するPDI」の順で実施した。

3)PDIについて

高橋（1974）が HTP 法を実施の際に用いる PDI の中から，人物画に関する PDI 全 19 項目を参考にし，筆者が作成した。質問は口頭で行い，以下の順で行った。

【1 枚目の人物画に関する PDI について】

- ① 人物像の性別について：「この人は男性ですか？女性ですか？」
- ② 人物像の年齢について：「この人は何歳ぐらいだと思いますか？」
- ③ 人物像のイメージについて：「この人はどういうイメージの人だと思いますか？」
- ④ 対象者と人物像の関係について：「あなたにとってこの人はどのような存在だと思いますか？」
- ⑤ 人物像の物語について：「この人を主人公にした話を作って教えてください」

【2 枚目の人物画に関する PDI について】

- ① 人物像の性別について：「この人は男性ですか？女性ですか？」
- ② 人物像の年齢について：「この人は何歳ぐらいだと思いますか？」
- ③ 人物像のイメージについて：「この人はどういうイメージの人だと思いますか？」
- ④ 対象者と人物像の関係について：「あなたにとってこの人はどのような存在だと思いますか？」
- ⑤ 1 枚目の人物像との関係について：「この人は 1 枚目に描いた人と関係がありますか？あるとしたら，どのような関係だと思いますか？」
- ⑥ 人物像の物語について：「この人を主人公にした話を作って教えてください」
- ⑦ 1 枚目と 2 枚目の人物像の比較について：「1 枚目と 2 枚目ではどちらが自分に近いと思いますか？」

【人物画テスト 2 枚法に関する感想】

最後に「絵を描いて質問に答える作業を通してどうでしたか？」を尋ねた。

2. 結果と考察

1)1 枚目と 2 枚目の人物像の関係性から見た人物画テスト 2 枚法の特徴について

「1 枚目と 2 枚目の人物像の間に関係があるかどうか」を尋ねた結果，6 割の学生は，1 枚目と 2 枚目の人物像を関係があるものとして描いていた（表 1）。1 枚目と 2 枚目の人物像の間に「関係がある」と答えた 12 名のうち 6 名の学生が，感想において，「1 枚目の人物像を描く際は何も考えずに描いたが，1 枚目の後に質問があったため，2 枚目を描く際には質問があると想定しながら描いた」，「1 枚目から 2 枚目への流れの中で，思いついた人を描いた」などと述べていたことから，PDI に答える過程で 1 枚目と 2 枚目の人物像を意識的に関係づけやすいことが示された。

表 1 1 枚目と 2 枚目の人物像の関係性の有無(%)

	男	女
関係あり	60	60
関係なし	40	40

1 枚目と 2 枚目の人物像には，どのような関係性があるのかを，筆者を除く臨床心理学

専攻の大学院生 2 名に KJ 法を用いて分類させ、結果を表 2 に示した。1 枚目と 2 枚目の人物像の関係性は、主に「他者との関係性が表れているもの」と「自己像に関するもの」の 2 つに分類された。「他者との関係性が表れているもの」の詳細は、「友人関係」、「異性関係」、「その他」の 3 つに分類された。一方、「自己像に関するもの」は、「理想の自己像と現実の自己像が表れているもの」、「1 枚目から 2 枚目にかけて、人物像の人生の過程が表れているもの（1 枚目に青年、2 枚目に老人と、1 人の人物像が成長している姿が描かれたものなど）」の 2 つに分類された。

表 2 1 枚目と 2 枚目の人物像の関係性の内容

		人数
他者との関係性	友人関係	4
	異性関係	2
	その他(家庭教師と教え子, 知り合い同士)	2
自己像に関するもの	理想の自己像と現実の自己像が表れているもの	2
	1 枚目→2 枚目に人物像の人生の過程が表れているもの	2

1 枚目と 2 枚目の人物像に「他者との関係性」を表した学生は 8 名（66.7%）であり、そのうち半数である 4 名の学生が 1 枚目に「自己像」、2 枚目に「自己像と関係がある他者像」を描いていた。一方、1 枚目と 2 枚目の人物像の関係性が「自己像に関するもの」であった学生のうち、1 枚目に「理想の自己像」、2 枚目に「現実の自己像」を描いたものは 2 名であった。さらに、「1 枚目から 2 枚目にかけて人物像の人生の過程が表れているもの」は、2 枚目の人物像に関する物語が 1 枚目の人物像に関する物語よりも、さらに将来に関する話が展開されたものであった。

特に「自己像と関係する他者像イメージが表れたもの」、「1 枚目から 2 枚目にかけて人物像の人生の過程が表れたもの」については、PDI における物語作成によって意識化された 1 枚目におけるイメージや物語が刺激となり、2 枚目のイメージや物語の内容が表現される可能性が示された。

以下に「自己像と関係する他者像イメージが表れたもの」、「1 枚目から 2 枚目にかけて人物像の人生の過程が表れたもの」の各事例を挙げ、それぞれの関係性における描画と PDI において対象者が答えた「人物像のイメージ」、「人物像が自分にとってどのような存在であるのか」、「人物像を主人公にした話」、「感想」を示すことで、どのような PDI が刺激となり、2 枚目の人物像が描かれるかを考察する。

2) PDI における「物語作成」が「他者との関係性を表現すること」について

1 枚目に「自己像」、2 枚目に「自己像と関係する他者像」が表れたものを図 1～2 に示した。

事例 A (図 1) では、1 枚目に「マイペース」な「理想とする自己像」を描き、2 枚目には「自己が必要とする友人像」を描いていた。また、2 枚目の友人像に関する物語では「1 枚目の人物像（自己像）の遅刻を注意する」と、マイペースな自己を支えてくれる友人の

話が語られており、1枚目と2枚目の人物像の関係性を具体的に捉えることが可能であった。さらに、感想において「2枚目のような友人がいないと困る」と、自己が必要としている友人像がどのような人物像であるのかを自覚している様子がみられた。このように、PDIによって、人物像に関する「物語」を作成させることで、1枚目の人物像の特徴である「寝坊するなどマイペースな様子」が意識化され、その人物像の特徴が刺激となり、2枚目に「1枚目の人の遅刻を注意する」という「マイペースな自己を支えてくれる友人像」を描いた可能性が考えられる。



			
1枚目		2枚目	
人物像のイメージ	楽天的。何でもいい方向に感じる人。	人物像のイメージ	落ち着いている感じの人。何事も冷静であるが、心配性。
どのような存在か	自分がなりたいと思う人。マイペースさに憧れる。	どのような存在か	自分のそばにいて欲しいと思う友人。
物語	行かないといけなところがあるが、寝坊する。すぐに、まあ、いいかと思い、どこか違うところに出かけようとする。	物語	朝起きて学校に行く。1枚目の人といつも一緒に授業を受けるが、1枚目の人が来ていないのが気になる。いつもの遅刻だと思い、1枚目の人に一言、注意をしなければと思っている。
感想	1枚目の人のようにマイペースになりたいが、実際はそうはいかない。周囲のことを気にしてしまう。1枚目の人を描くことで、今の自分の置かれている環境を何とかしたいということが分かった。また、自分はふらふらとしているから、2枚目の人のようにしっかりとした友人がいてくれないと困る。1枚目の人の話があったので、2枚目のような人になったと思う。		

図1 事例A(女性)「友人関係が表れたもの」

また、人物像を描き、PDIにて物語を作成する過程を通して「1枚目と2枚目の人物像がどのような関係であるか」を明確にすることで、A自身が「1枚目の人のようにマイペースになりたいが、実際はそうはいかない。やはり周囲のことを気にしてしまう。1枚目の人を描くことで、今の自分の置かれている環境を何とかしたいということが分かった」と感想を述べていることから、理想像のようになれないことや現実における自己の状況を変えたいという気持ちに気づいている様子であった。さらに、「2枚目のようにしっかりした友人がいてくれないと困る」と述べており、「自分が必要とする他者像がどのような人物像なのか」などA自身が自覚していた。

以上のことから2枚法では、他者との関係性が表れることにより、自己が必要とする他者像を自覚するなどの自己理解を促す可能性が考えられる。

事例B(図2)は、1枚目には「高校のときになりたかった自己像」を描き、2枚目には「昔自分が憧れていた姉のイメージ」が表現された。

2枚目の人物像の物語では、「周りにはいつも友達がいる、周囲から頼られている。勉強はあまりできない。母親が学力のことを心配して、1枚目の人を家庭教師として雇う。家庭教師とは仲が良く、お姉ちゃんってこんな感じかなと感じている」と語られていることから、2枚目の人物像が1枚目の人物像を慕う内容であり、親しい関係にあると考えられた。感想においては「昔の自分は、友達が少なかったため、姉のように周囲に頼られていて人望が厚いところがうらやましかった」と、2枚目の人物像に関する物語の内容を受けてB自身が過去のことを回想している様子であった。また、「小さい頃は姉のことが好きだったので、姉と一緒に過ごしたい気持ちが強かった。(中略)今は姉に対して甘えの部分がなくなり、姉は姉と思えるようになった」と述べていることから、姉に対する気持ちの変化を意識している様子が見られた。

以上のことから、事例Bからは、PDIにおいて人物像の物語を作成させる過程で、他者に対してどのような気持ちを抱いているのかを認識するなどの自己理解を促す可能性が考えられる。

安藤(1990)は、「人物二人法」という1枚の画用紙に人物を2人描かせ、思い浮かぶ背景を描いて完成させる描画法を考案し、心理臨床場面で用いることで、クライアントにこれまで他者に対して取っていた態度を問い直させ、再検討させ、それを意識化させる過程を通して、クライアントの自己探求を促進させることを明らかにしている。人物画テスト2枚法においても、2枚連続で人物像を描かせ、PDIにおける物語作成によって「自己と他者との関係性」が明確になる過程において、「自己が必要とする他者像はどのような人物像なのか(事例A)」、「他者に対する気持ちの変化に気づく(事例B)」など自己理解を促す可能性があるところに、人物画テスト2枚法に「人物像を主人公にした物語」を尋ねるPDIを加えて用いることの有用性が見出された。また、セラピストにとっても、PDIにおける人物像の物語作成から他者との関係性が具体的に表現されることで、クライアントの対人関係を理解しやすくなることが考えられる。


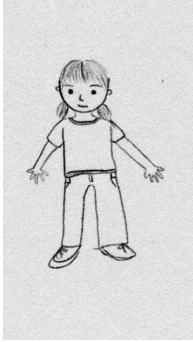
			
1 枚目		2 枚目	
人物像のイメージ	賢くて、勉強ができる感じ。	人物像のイメージ	スポーツマンで。明るい感じ。
どのような存在か	中学・高校生の頃のなりたかった自分。	どのような存在か	まぶしい存在。うらやましい感じ。憧れる。
物語	小さいときから、家が音楽一家でピアノを習っていた。両親はピアニストになりなさいと言うが、本人がなりたいのは教師なので、親を説得し、自身の夢である教師の道へ進もうとしている。今はアルバイトをしながら、教師の採用試験に挑戦しようとしている。	物語	父がおらず、母と小さい弟と住んでいる。周りにはいつも友達がいるので周囲から頼られている。スポーツは得意であるが、勉強はあまりできない。母親が学力のことを心配して、1 枚目の人を家庭教師として雇う。家庭教師とは仲が良く、お姉ちゃんってこんな感じかなと感じている。
感想	1 枚目の人は、将来の夢が教師ということや勉強やピアノが得意ということが昔の自分に近い。最初は人物の設定などを考えてはいなかったが、質問されることで、1 枚目と2 枚目の人に関係が見えた。2 枚目は、昔自分が憧れていた姉のイメージがでてきた。昔の自分は、友達が少なかったため、姉のように周囲に頼られていて人望が厚いところがうらやましかった。小さい頃は、姉のことが好きだったので姉と一緒に過ごしたい気持ちが強かったが、姉にはいじめられるばかりで、そっけなく接されることが多かった。今は姉に対して甘えの部分がなくなり、姉は姉と思えるようになった。そして、今の自分の夢が昔と変わりつつあることがはっきりと分かったように思う。		

図2 事例B(女性)「家庭教師と教え子という関係性が表れたもの」

3)PDIにおける「物語作成」が「人物像の人生の過程を表現すること」について

1 枚目から 2 枚目にかけて人物像の人生の過程が表れるものを図 3~4 に示した。

事例 C (図 3) では、1 枚目から 2 枚目にかけて、人物像が成長する過程が明確に表されていた。1 枚目の人物像に関する物語では「戦争に行って、帰ってからの生活」と語り、2 枚目では「1 枚目の人物像が老人になり、ひ孫ができる」と 1 枚目よりもさらに未来の話が展開され、1 枚目から 2 枚目にかけて時間的な流れが生じていた。

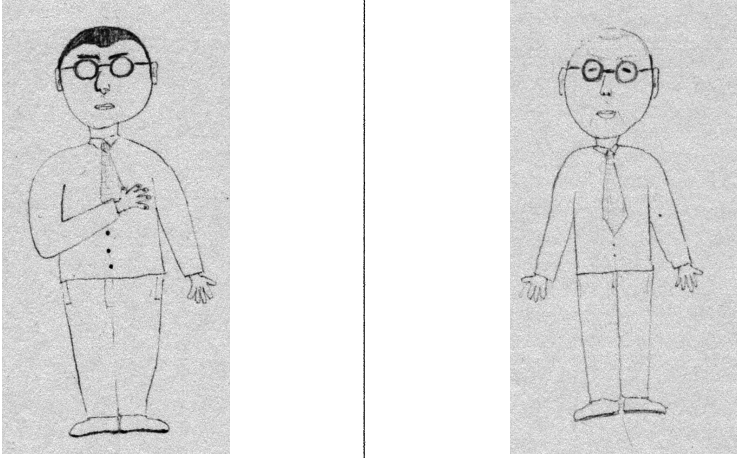
			
1 枚目		2 枚目	
人物像のイメージ	戦時中の人。	人物像のイメージ	1 枚目の人の何十年か後。
どのような存在か	若いけど、いろんな経験をしているから、尊敬できる人。	どのような存在か	大きな包み込んでくれるような存在。
物語	この人は若くして、戦争に行く。多くの友人を戦争で亡くすが、この人は無事に帰ってくる事ができる。そして、ごく普通に暮らすが、戦争中に体験した悲しみなどは胸のうちに秘めておき、一切そのことは話さない。	物語	老人になって、ひ孫ができる。そのひ孫に、ある時、人生や戦争のことなどを語り出す。今まで語ってなかったことをひ孫には話すことができる。この人は前に進むことができる。
感想	1 枚目は「年を重ねながら自分を模索する」感じ。実際、自分もいろいろと悩むことがあるので、1 枚目の人は今の自分に近いなあと思う。2 枚目になると「人生のゴール」という感じ。最近感じていたことを整理できたように思う。言葉にすることで、普段よりはっきりした。		

図 3 事例 C(男性)「2 枚目に 1 枚目の人物像が成長した姿が表れたもの」

また、1枚目の人物像に関する話では「戦争中に体験した悲しみなどは一切話さない」という内容であったが、2枚目の人物像に関する話には「今まで語ってこなかった戦争のことなどを語り、前に進むことができる」と、年齢だけでなく、精神的にも成長した姿が表れていた。さらに、そのように精神的に成長する姿をC自身が「1枚目は年を重ねながら自分を模索する感じが自分に近い。2枚目は人生のゴール」と自己の人生の過程として捉えている様子であった。

山本(1992)は、TATにおいて物語を作成させることには、図版に描かれた場面の状況を設定させ、さらに設定した状況をひとつの方向の結末に導く働きがあると述べている。よって、物語を作成させることには、ひとつの結末に向けての話が展開され、時間的な流れを生じさせる可能性があると考えられる。本研究においても、PDIによって1枚目と2枚目のそれぞれの人物像に関する物語を作成させることに、ひとつの結末に向けて話を展開させる効果があり、未来志向的な話が生じた可能性がある。さらに、実施順序を「1枚目の人物像→1枚目の人物像に関する物語作成(PDI)→2枚目の人物像→2枚目の人物像に関する物語作成(PDI)」とすることで、PDIによって明らかになった1枚目の人物像に関する物語の内容が刺激となり、2枚目において1枚目よりもさらに「未来志向的な話」が展開する可能性が考えられる。

事例D(図4)では、1枚目にスーツ姿の男性が描かれており、「半分は今の自分で、後の半分はこれからの自分」と述べていることから、現在の自分に近い自己像を描いていた。一方、2枚目には「理想像」と述べていることから「理想の自己像」を描き、これを主人公にした物語では「何もしておらず、自分の好きなように生きているが、周囲から悪いことをしているとは見えない」と、1枚目の人物像の物語で語られた「何かを背負っている感じ」とは異なる「自分の好きなように生きている」様子が語られた。感想では、「1枚目から2枚目の人になったらいい」と述べており、理想とする自己像になるための過程が1枚目から2枚目にかけて表れていた。D自身が「本当になりたいと考える自己像(2枚目)になるためには、1枚目の人になる必要がある」と述べ、今後に向けて自己が「歩んでいきたい方向性」を再確認している様子が見られた。大学生や大学院生は今後、就職や進学といった人生において様々な決断を迫られることが多く、その際「自己が今後どのような過程を歩んでいきたいか」を明確に理解しておくことが重要であると考えられる。そのため、人物画テスト2枚法に「人物像を主人公にした物語」を尋ねるPDIを加えて用いることで、「今後の方向性」を明らかにし、今後に向けての意思決定を促すことが期待できる。また、心理面接において、クライアントが「今後どうなりたいのか」を捉えておくことは、面接目標を設定する際や、面接における今後の方針を設定する際に有用な視点になると考えられる。

以上のことから、PDIにおいて2枚それぞれに描かれた人物像を主人公にした物語を作成させることにより、「他者との関係性」が具体的に表れることや「人物像の成長過程や方向性」が表れることで、現在における自己の状況や今後に向けて自己が成長する姿を認識し、学生自身の自己理解を促す可能性が考えられる。しかし、20名中11名の学生が「人物像を主人公にした話」を作ることに難しさを感じていたため、PDIにおける人物像に関する物語作成を「人物像がこれからどうなっていくか」を尋ねる質問に改良することで、答えやすく、さらに未来志向的な話の展開を生じさせ、自己理解につながることを目指し

た。

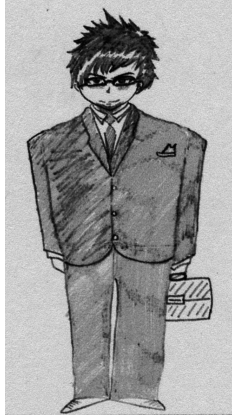

			
1 枚目		2 枚目	
人物像のイメージ	賢くないんだけど、賢いふりをするイメージ。	人物像のイメージ	何もすることがない人。
どのような存在か	自分に似ている人。半分は今の自分で、後の半分はこれからの自分。	どのような存在か	憧れ。「しなければならないこと」がないところがうらやましい。理想像。
物語	中身は子どものままで、年だけとる。やってることや考え方は変わらないけど、見た目がふける。スーツは自立の象徴で、何か分からないけど、何かを背負ってる感じ。	物語	この人は、周囲から文句を言われず、自分の思い通りに生きている。何もしておらず、自分の好きなように生きているが、周囲から悪いことをしているとは見えない。逆に何もしていないことがプラスに見える人。
感想	1 枚目から 2 枚目の人になつたらいい。1 枚目は「独立」を表していて、24 時間忙しく、昨日のことを思い出せない感じ。2 枚目は「自由」を表していて、毎日余裕があって楽しめる感じ。1 枚目も 2 枚目もどちらもなりたい自分であるが、どちらかというとなら 2 枚目の人の方に本当はなりたい。ただし、2 枚目の人になるためには、1 枚目の人になってからでないと 2 枚目の人になることはできないと思う。 2 枚目でまた人を描くようにいわれたときは、どうしようかと思った。関係がある人がいいのかわからない人がいいのか悩んだが、関係がある人を描こうと思った。		

図 4 事例 D(男性)「1 枚目から 2 枚目にかけて理想とする自己像が歩む過程が表れたもの」

研究 2

1. 方法

1) 対象者

大学生・大学院生 20 名（男 10 名，女 10 名，平均年齢=21.5 歳，SD=0.94）。

2) 人物画テスト 2 枚法について

研究 1 における用具，教示内容，実施順序と同じものとした。

3) PDI について

研究 1 の結果から，変更する必要があると判断された PDI は改めた。「年齢」，「性別」，「イメージ」，「対象者と人物像の関係」，「1 枚目と 2 枚目の人物像の関係性の有無」に関する質問項目は，研究 1 と同様であるが，「人物像の今後について」尋ねる質問は研究 2 において変更された項目であった。

【1 枚目の人物画に関する PDI について】

①から④までの質問項目の内容，実施順序は，研究 1 と同じものとした。質問項目⑤は，以下のように変更した。

⑤ 人物像の今後について：「この人はこれからどうなっていくと思いますか？」

【2 枚目の人物像に関する PDI について】

①から⑤までの質問項目の内容，実施順序と⑦の質問項目の内容は研究 1 と同じであった。質問⑥は，以下のように変更した。

⑥ 人物像の今後について：「この人はこれからどうなっていくと思いますか？」

【人物画テスト 2 枚法に関する感想】

研究 1 と同様に，最後に「絵を描いて質問に答える作業を通してどうでしたか？」を尋ねた。

2. 結果と考察

1) 変更された PDI である「人物像がこれからどうなるか」について

研究 1 では，PDI で最後に尋ねた感想において「人物像を主人公にした話を作ることは難しいと答えた学生が 20 名中 11 名おり，多くの学生が「主人公にした話」を作ることに難しさを感じていたことが分かった。

そこで，研究 2 では，対象者が答えやすく，さらに未来志向的な物語を展開させやすくするために，「人物像を主人公にした物語」に関する質問を，「人物像がこれからどうなっていくか」を尋ねる質問に変更した。変更前，変更後それぞれにおける PDI の内容と順序は表 3 に示した。変更後の PDI を用いて，再び大学生・大学院生 20 名を対象に人物画テスト 2 枚法を実施した結果，「これからどうなっていくか」という質問に対して難しいと答えた学生は 2 名であったことから，研究 1 における「主人公にした物語作成」よりも「これからの物語作成」の方が答えやすい PDI であることが明らかになった。

「1 枚目と 2 枚目の人物像の間に関係があるかどうか」を尋ねた結果，7 割以上の学生は，1 枚目と 2 枚目の人物像を関係があるものとして描いていた（表 4）。1 枚目と 2 枚目の人物像の間に「関係がある」と答えた 15 名のうち 6 名の学生が，感想において，「1 枚目の人物像を描く際には何も考えずに描いたが，1 枚目の後に質問があったため，2 枚目を描く際には質問があると想定しながら描いた」，「質問されてイメージがふくらんだ」，「1 枚目から 2 枚目への流れの中で，思いついた人を描いた」と述べており，研究 1 の結果と同じように，PDI に答える過程で 1 枚目と 2 枚目の人物像を意識的に関係づけやすいこと

が示された。

表 3 変更前の PDI と変更後の PDI について

	変更前	変更後
1 枚目	①この人は男性ですか？女性ですか？ ②この人は何歳ぐらいだと思いますか？ ③この人はどういうイメージの人だと思いますか？ ④あなたにとってこの人はどのような存在だと思いますか？ ⑤この人を主人公にした話を作って教えてください。	①この人は男性ですか？女性ですか？ ②この人は何歳ぐらいだと思いますか？ ③この人はどういうイメージの人だと思いますか？ ④あなたにとってこの人はどのような存在だと思いますか？ ⑤この人はこれからどうなっていくと思いますか？
2 枚目	①この人は男性ですか？女性ですか？ ②この人は何歳ぐらいだと思いますか？ ③この人はどういうイメージの人だと思いますか？ ④あなたにとってこの人はどのような存在だと思いますか？ ⑤この人は 1 枚目に描いた人と関係がありますか？ ⑥この人を主人公にした話を作って教えてください。 ⑦1 枚目と 2 枚目ではどちらが自分に近いと思いますか？	①この人は男性ですか？女性ですか？ ②この人は何歳ぐらいだと思いますか？ ③この人はどういうイメージの人だと思いますか？ ④あなたにとってこの人はどのような存在だと思いますか？ ⑤この人は 1 枚目に描いた人と関係がありますか？ ⑥この人はこれからどうなっていくと思いますか？ ⑦1 枚目と 2 枚目ではどちらが自分に近いと思いますか？

注) 下線部は、変更された質問項目

表 4 1 枚目と 2 枚目の人物像の関係性の有無(%)

	男	女
関係あり	80	70
関係なし	20	30

1 枚目と 2 枚目の人物像には、どのような関係性があるのかを、筆者を除く臨床心理学専攻の大学院生 2 名に KJ 法を用いて分類させた (表 5)。研究 2 においても 1 枚目と 2 枚目の人物像の関係性は、主に「他者との関係性が表れているもの」と「自己像に関するもの」の 2 つに分類された。

研究 1 と同様に 1 枚目と 2 枚目の人物像の間に「友人関係」や「異性関係」といった関係性が表現されていた。「友人」、「異性」、「家族」、「知り合い」といった関係性を表現した学生 12 名のうち 5 名が、1 枚目に「自己像」、2 枚目に「自己像と関係がある他者像」を描いており、研究 1 と同じような結果が得られた。ただし、研究 2 においては、より未来

志向的な話の展開を生じさせやすくするため、PDIにおける「人物像を主人公にした話」から「人物像がこれからどうなっていくか」という質問に変更した結果、「異性関係」を表現した2名の学生のうち1名が、2枚目の人物像の物語に1枚目の人物像に関する未来の話表現しており、研究1では見られなかったパターンが見られた。

また、研究1でも見られた「1枚目から2枚目にかけて、人物像の人生の過程が表れるもの」は、研究2では3事例に見られた。ここでは、1枚目から2枚目にかけて人物像が成長する過程が表現され、2枚目の人物像の「これから」に関する話では、1枚目よりも「これからどうなっていくか」という話の展開が生じていることから、「これからどうなるか」を問うことで、未来志向的な話が作成され、1枚目から2枚目にかけて人物像の人生の過程が表れると考えられる。

表5 1枚目と2枚目の人物像の関係性の内容

		人数
他者との関係性	友人関係	3
	異性関係	3
	家族関係	4
	知り合い	2
自己像に関するもの	1枚目→2枚目に人物像の人生の過程が表れているもの	3

以下に、研究1では見られなかった2枚目の他者像に関する物語の中で1枚目の人物像の「これから」が語られる事例をあげた。描画とPDIにおいて対象者が答えた「人物像のイメージ」、「人物像が自分にとってどのような存在であるのか」、「人物像にこれからの関係する話」、「感想」を示した。

2)2枚目の人物像の物語に表現された1枚目の人物像の「これから」について

2枚目の他者像に関する物語の中で1枚目の人物像の「これから」が語られたものを図5に示した。

事例E（図5）では、2枚目の人物像に関する「これからの話」に、1枚目の人物像の未来の話が語られた。E自身が、感想において「女の子が幸せになるためには、パートナーが必要と思った。だから2枚目は男の子を描いた」と述べていることから、1枚目の女性像の「これから幸せになっていく」という物語が刺激となり、2枚目の男性像が描かれたと思われる。さらに、2枚目の人物像の「これから」に関する話では、「女の子と幸せになっていく。そのうち結婚する」と、2人の人物像における未来の話を展開していた。研究2における「これから」に関するPDIは、2人の人物像における未来の話を展開させることが期待できると考えられる。

研究1では、人物像を「主人公にした話」を尋ねることにより、未来志向的な話を生じさせる可能性はあると考えられるが、「これからどうなるか」という質問のように、より直接的に「未来」だけを意識させる項目ではないと思われる。1枚目の人物像に関する「これから」が意識されることで、2枚目の人物像が「1枚目の人物像とこれからデートする相

手」として描かれ、さらに 2 枚目の人物像の物語に関しても 2 人の「これから」に関する話が生じていたと考えられる。このように人物像の「これから」を尋ねる PDI により、2 枚の人物像がともにこれからどうなっていくのかという話の展開が見られたことから、二者関係における「これから」の物語展開が期待でき、心理臨床場面で、クライアントの対人関係が未来に向けてどのように変化していくのかを捉える際に、有用な視点になると考えられる。


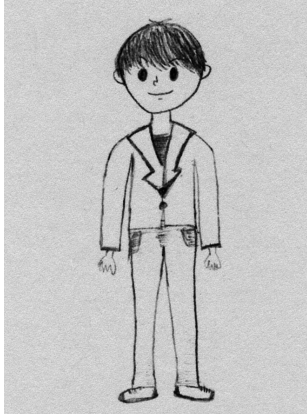
			
1 枚目		2 枚目	
人物像のイメージ	自分がデートしたいと思う可愛い女の子。	人物像のイメージ	1 枚目の女の子の彼氏。デートの相手。
どのような存在か	女っぽくない自分とは逆で、可愛くて自分の手が届かない存在。自分の中の女の子のイメージ。	どのような存在か	自分とは関係ないが、1 枚目の女の子にとっては、幸せにしてくれる相手。
「これから」に関する話	これから、デートに出かける。それで、幸せになっていく。	「これから」に関する話	女の子と幸せになっていく。しっかりと、金持ちなので、そのうち結婚する。
感想	1 枚目の女の子は何も考えずに描いたが、2 枚目は 1 枚目の女の子に合うように考えながら描いた。話の中で女の子が幸せになると言ったので、女の子が幸せになるためには、パートナーが必要と思った。だから、2 枚目は男の子を描こうと思った。この女の子と男の子は、自分と住んでいる世界とは違う中において、まるでテレビの中の世界を見ている感じ、自分にはない、自分に出来なさそうなことが起こる感じで、憧れる。		

図 5 事例 E(女性)「異性関係が表れたもの」

ただし、1例のみに示されたことから、今後、「これから」に関する物語作成が、二者関係における「これから」の物語展開を生じさせるかどうかは検討の余地がある。

以上のことから、人物像の「これから」を尋ねることで未来志向的な話を生じさせることが考えられ、研究1における人物像を主人公にした物語作成と同じはたらしきがあることが示された。以下に研究1と研究2をふまえて、PDIを加えた人物画テスト2枚法の有用性について考察した。

3)PDIを加えた人物画テスト2枚法の有用性について

研究1と研究2の結果から、1枚目に関するPDIが刺激となり、2枚目の人物像が描かれる可能性が示された。さらに、「人物像を主人公にした話」や「人物像がこれからどうなるか」といったPDIによる物語作成では、未来志向的な話を生じさせやすいことが考えられた。

バウムテストなど他の描画テストでPDIを用いる際には、「描画→PDI」という順序で実施されるが、本研究では、「1枚目の描画→1枚目に関するPDI→2枚目の描画→2枚目に関するPDI」という、2枚法独自の順序でPDIを用いた。そのため、1枚目に関するPDIが刺激となって、2枚目の描画と物語が表現された結果、「1枚目と2枚目の人物像の間に親密な関係性（友人関係や異性関係など）が表れること」や「1枚目から2枚目にかけて人物像が成長する」といった時間的な流れが表れること」が見られ、対人関係の理解や将来に向けての方向性を確認するなど、自己理解を促進させる可能性が示された。今後、心理臨床場面において、クライアント自身が、対人関係のあり方を理解する際や今後に向けての意思決定を促す際に、役立つことが期待できそうである。また、PDIを加えることで、描画を通したクライアントの語りが生じていた。今後、心理療法において、言語によって自己を十分に表現できない子どもがクライアントの場合、人物画テスト2枚法にPDIを加えて用いることで、クライアントの語りを促すことが期待できそうである。

一方で、セラピストにとっても人物画テスト2枚法にPDIを加えて用いることで、クライアントの対人関係についての理解が深まる可能性や、クライアントの将来像や予後を理解するための一助になることが期待できると思われる。

また、本研究では、学生を対象にPDIを加えた人物画テスト2枚法を実施し、健康な対象者における描画やPDIの特徴を明らかにした。本研究で明らかになった「1枚目と2枚目に他者との関係性が具体的に表れること」や「1枚目から2枚目にかけて人物像の成長過程や方向性が表れること」は、健康な対象者における標準的な反応として考えることができ、今後、心理臨床場面でPDIを加えた人物画テスト2枚法を活用する際の一助になると考えられる。

今後の課題

今後の課題としては、本研究で検討されたPDIを用いて、多くの対象者に人物画テスト2枚法を実施し、統計的手法からその有用性を検討することがあげられる。また、特定の対象者に長期的に用いる事例研究から、PDIを加えた人物画テスト2枚法に対する工夫と検討を重ねていくことが必要とされる。

付記：本研究は、2007 年春に徳島大学大学院人間・自然環境研究科（臨床心理学専攻）に提出した修士論文を一部加筆・訂正したものである。調査にご協力くださいました学生の皆様に、心から感謝申し上げます。

引用文献

- 安藤 治 1990 人物二人法 —他者表現の治療的機能— 芸術療法学会誌, 21, 46-54.
- 新井智幸・田中勝博 2006 HTP 法における Post Drawing Interrogation に関する研究 —自己への気づきを中心に— 日本描画テスト・描画療法学会第 16 回大会発表抄録集, 46.
- 生地 新 2006 ナラティブ・アプローチにおける描画 臨床描画研究, 21, 76-85.
- 角山富雄 2006 描画ナラティブ法 日本描画テスト・描画療法学会第 16 回大会発表抄録集, 20.
- 岸本寛史 2006 NBM と描画 臨床描画研究, 21, 44-58.
- 森田裕司 1995 バウムテスト 2 枚法の有効性に関する考察 —臨床経験による検討— 中国四国心理学会論文集, 28, 90.
- 野瀬祥代 1997 バウムテスト 2 枚法における全体的印象の差異に関する一研究 —SD 法による因子分析を用いて— 中国四国心理学会論文集, 30, 76.
- 佐伯 伴 1991 イメージと絵画 —認知心理学からの考察— 臨床描画研究 Annex, 3, 38-57.
- 高橋雅春 1974 描画テスト入門 —HTP テスト— 文教書院
- 高橋雅春 1986 HTPP テスト 臨床描画研究, 1, 50-67.
- 天満弥生 2004 人物画テスト 2 枚法の有効性に関する一考察 徳島大学卒業論文 (未公開)
- 山田良一 1998 アイデンティティの確立 古屋健治・星野命・山田良一 (編著) 青年期カウンセリング入門 第Ⅲ部 川島書店
- 山本和郎 1992 TAT かかわり分析 —ゆたかな人間理解の方法— 東京大学出版会
- 山下真理子・津田浩一・一谷 彊・国吉政一・林 勝造 1983 バウムテストの実施方法の検討 —いわゆる「二枚実施法」について 日本心理学会第 47 回大会発表論文集, 633.